十八世紀ドイツの子どもの本(2)

ヨーアヒム・ハインリヒ・カンペ『ロビンソン・ジュニア』

佐藤　茂樹

教育とメディアの出会い

今回は、物語を取り上げます。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』をご存知の方は多いと思われます。十八世紀の始めにイギリスで出版されたこの小説は、もともと幼少の子どもを対象に書かれたものではありませんでした。それを子どもの教育を念頭に改作・翻案したものが、ここで紹介するヨーアヒム・ハインリヒ・カンペの『ロビンソン・ジュニア―子どもたちの快適で有用な楽しみのために―』（第一部一七七九／第二部一七八〇）です。この物語は、発表直後からヨーロッパの主な言語に翻訳されたばかりか、ロビンソンの本家であるイギリスでも、原作に劣らない人気を呼びました。当時としては、ドイツ語の書物が自身の言語的国境

を越えて広範囲の読者を得た稀な例といえるでしょう。

著者のカンペ（一七四六―一八一八）は、十八・十九世紀のドイツを代表する知識人であるフンボルト兄弟（ベルリンのフンボルト大学やフンボルト・ペンギンなどにその名をとどめている人たちです）の家庭教師を始めとして、博愛主義的教育の実践校であるデッサウの汎愛舎での教育と運営に携わり、そこを離れた後には、ハンブルグに移って十二人の生徒を相手に理想的教育に着手しました。一七七七年のことで、その二年後の『ロビンソン・ジュニア』に描かれた家庭的な教育の場面は、このときの様子を髣髴とさせるものがあります。一方、恵まれた条件の下での理想的教育は、そのままの形では、時代の要求する教育の一般的普及とは相容れない一面を持っています。カンペの著作活動は、それまでいわば「私家版」にとどまらざるを得なかった教育現場の限界を、新たに登場したメディアを利用することで乗り越える試みと見なすことができます。『ロビンソン・ジュニア』の成功は、活字印刷技術による一回的出来事の時間と空間の制約を越えた普及というメディアの革命と相まって、そうした「私家版」の境界を大きく超えて未知の読者に向けて理想的な教育を公開するという、教育と出版物を取り巻く事情の大きな転換を象徴する出来事でもあったのです。

〈文明人〉への再教育の物語へ

『ロビンソン・クルーソー』は、ご存知のように、難破によって孤島に漂着した主人公のサバイバルをめぐる物語です。過酷な条件を自分自身の才覚と努力によって克服していくストーリーは、精神の成長期にある子どもの心をもっとも捉えるものでしょう。就眠前などに、自分自身を主人公にしてそのような空想を織り成した経験を持つ人は多いのではないでしょうか。その意味で、このストーリーの核心自体が、すでに児童文学のアルファにしてオメガであるといえます。

ところで、カンペの『ロビンソン』は、ロビンソン・クルーソーが直接登場する物語ではありません。直接の

登場人物は、両親と数人の子どもたち（実子はひとりだけです）と家族の友人たちで、ロビンソンは父が語るエピソードの中に登場するにすぎません。父を囲んで子どもたちがロビンソンの物語を聞き、数々の出来事の顛末に固唾を呑んで引き入れられながらも、ときに父にその行動の是非を問いかけられてはみなで語り合ったり、未知の世界についての知識や情報を得たりする構成なのです。ドイツの文庫本にして三五〇ページほどの全体は三〇章に分割されており、一章に割り当てられた分量は、子どもにふさわしい他の行動がおろそかにならないよう配慮されたものとなっています。各章が〈夜〉と題されていることは、読書の楽しみはそれぞれが果たすべき日々の営み（家族のモットーは、「祈り、そして仕事に励めよ！」です）を終えた時間の楽しみであるべきことを意味しています。

第一夜では、まず進んで手伝いを申し出る子どもたちの姿が示されます。肝心のロビンソンの姿は、すでにふたりの息子を失った両親に唯一の希望として甘やかされて育ち、堅実な歩みとは無縁な日々を過す十七歳の少年として描かれています。そして一攫千金を目指して両親に無断で船出するところからロビンソンの冒険が始まるのですが、ここでもうその是非をめぐる議論の材料が提供されることになります。さらに、物語の進展の中には、ロンドン、北海、リッツェビュッテル、エルベ川、ハイリゲンラント島といった未知の地誌的情報が満載されており、作中の子どもたちはそうした知識や情報を正確に把握しながら話の先を待たなければなりません。

このように、著者は原作を大筋で継承しながらも、いくつかの点で注目すべき重要な変更を施しています。まず、ロビンソンの年齢を引き下げて十七歳の少年にしたことから考察してみましょう。原作の主人公は、大人です。すでに経験に裏付けられた多くの知識を駆使し、実践的な理性を働かせることができる人物です。それに対して十七歳の主人公は、社会の入り口に立ったばかりの未経験な人間です。読者の年齢はもっと下に想定されていますので、十七歳という年齢はその一歩手前にある子

どもたちが自分の近未来を重ねて受け止めることのできる年頃になっています。しかも、この点が特に重要なのですが、彼は本来なすべきことを怠ってきた少年として設定されています。そのために、生存に必要なすべてを、彼は誰の助けも期待できない状況で一から学び直さなければなりません。遅ればせながら始める彼の自己形成の過程は、その分だけいっそう、蔑ろにしてきたことの大切さを強調する教訓性をも帯びたものとなります。こうして、孤独な生存をめぐる戦いの物語は、十八世紀までのヨーロッパが達成してきた〈文明人〉への過程をひとりの少年がたどり直す戦いの物語となったのです。

〈父〉に倣いて

以上の変更に劣らず重要なのは、本来のロビンソンの筋をエピソードにして、それを父が語り、子どもたちが聞くという枠筋で囲い込んだことです。枠筋によって、まず全体がロビンソンのパースペクティヴの物語からそれを相対化するパースペクティヴを合わせ持つ二重構造の物語になりました。こうした枠構造は、十八世紀の啓蒙的児童書に特徴的なものです。一般に枠筋として好まれるのは散歩の場面や旅行の話を聞く場面などで、時間的・空間的に次元を異にするエピソードがそうした日常的な会話の中から生じては、枠筋の登場人物の地平に常に引き戻され、経験的な現実のフィルターにかけられ論評の対象とされる

のです。そしてカンペの『ロビンソン』の場合、枠筋は批判的距離を作り出す仕掛けという意味以上に大きな役割を担っています。それは、〈父と子の世代継承〉というこの時代のもっとも重視される軸を物語の中に組み入れることができたことです。十八世紀の市民的エートスにとって、父は子どもが自分の将来を重ね合わせる完成した教養のモデルなのです。これを物語に即して示しましょう。

(1) 知識の仲介者

この書物には、〈河口〉など子どもの知らなかった語義の説明に始まり、船の各所の名称、ジャガイモの伝播、接木の仕方、テコの原理等、到るところに博物や地誌や役に立つ科学の知識や情報が満載されています。父は第一に、実際的な場面に即した正確で幅広い知識を仲介します。

(2) 正しい思考の仲介者

父はまた、議論を巧みに導きながら、子どもの思考の出発点の誤りを正し、先入観を取り除き、理性的な思考へと到らせる役目をも果たします。例えばロビンソンはパンの実のなる木を前にして、切り倒して船を作るべきかそのままにして実を得るべきか思い悩みますが、この問題は父によって子どもたちの間の議論へと移されます。父はまずそれぞれに立場を表明させた後、理由を挙げさせ、利点と欠点を検証して、ロビンソンの置かれた状況ではどれがよりふさわしいかを考えさせます。

(3) 正しい行動の仲介者

目先の楽しみを断念することによって、それを超えた大きな喜びに到ることなどを教えます。ときには、自分自身の行いを通してそれを示しもします。

そして、この〈父〉は個人的な父にとどまりません。個人的な父の姿の背後には社会の合意としての〈父〉が控え、内在化した規範＝超自我として現実のひとりの父の個別的言動を超えて社会の潜在的な命令規範となって働くのです。

社会化という教育目標

ロビンソンが故郷に帰還して社会の有益な一員となる点に強調を置いた変更点も忘れてはなりません。著者が、とりあえず食と住の目途のついたロビンソンに最初にさせたことは、時の経過を記録し、安息日その他の祝祭日を識別できるようにして、生活の秩序をキリスト教世界の秩序に合わせることでした（第四夜）。これが道具をつくることと並んで文明化した人間のする出発点だというわけです。こうして、物語の当初から、彼は自分では意識しないままに共同社会の枠を外れないように振舞わされています。そして不足に悩む数々の経験を経る中で、孤独な人間の限界を痛感し、自己を形成するということは、長い年月を通して積み上げられてきた社会の一翼を担い、自分が身につけた技能を通じてそれをさらに積み上げていく仕事に参加することだという認識に到るのです。こうして「個人的自己形成から共同性へ」というこの物語の大きなテーマが完成します。著者自身、このテーマを三段階に構成したと序文で述べています。

(1) たったひとりで、いかなるヨーロッパ的道具も持たず、唯一自分の知力と腕だけで苦境を切り抜ける段階。一方で孤独な人間がいかに無力かを、もう一方で熟慮と接続的な努力が置かれた状況をいかに改善することができるかを示す。

(2) 助力者を得た段階。他者との交わりがあるだけでいかに人間の状態がよいものとなりうるかを示す。

(3) ふたたび道具とたいていの生活必需品を手にした段階。不足することがないので軽んずるのが常の多くの品々がいかに偉大な価値を持っているかを知る。

ロビンソンはこの三つの段階を経て帰還を思い立ちますが、途中またしても難破に会って産を失い、〈勤勉と中庸〉という〈後天的に獲得した第二の天性〉だけを土産に故郷の町に帰り、手仕事に従事して物語の輪は閉じます。〈勤勉と中庸〉はまさしく市民的徳目に他なりま

せん。そして彼が父の仕事（仲買人＝デスク・ワーク主体の中産経済人）を引き継がず手仕事に就くことからは、逆説的に彼の市民的徳目の実践への転化が窺われます。実際、市民の子どもは市民の子どもであるからこそ、自分が決して従事しない手仕事などの意義を知っていなければならず、そのために手仕事の職場見学などをさせられもしたのです。

怠惰と不遜から一切を学ぶことをしなかった少年が、船の難破によって孤島での単独生活を余儀なくされ、必要と経験から学習能力を開発し自己を形成する物語。この構想は、それ自体啓蒙主義的教育観にかなっています。それは、必要な自己形成を怠ってきたことがもたらす実際的な不都合への教訓ともなれば、合理的思考のもたらす実践的利益への啓蒙ともなりうるからです。特にカンペのロビンソンがデフォーの場合と違って、難破によって一切の文明の利器を失い、みずからの「頭と腕」だけで文明化の過程をたどり直す話は、人間の理性の歴史への絶対的な肯定を物語ることに通じるといえましょう。しかし、カンペの物語は、個人的な形成史＝教養を語ることにとどまりません。政治的・社会的後進性というドイツ市民の置かれた現実を前にして、孤島のロビンソンの自己形成は文明に背を向けた自然人の物語であってはならなかったのです。彼の完成は、もう一度自分が出奔してきた市民生活

の場へと移されなければなりません。そして、それを物語中の人物のレベルにとどめず、ロビンソンの行動の是非をさらに共同の場で議論する枠筋を通して、読者の次元にも開こうとする。ここにカンペの『ロビンソン』改作の最大の特色とその彼の生きた時代の最大の特色があるといえましょう。

矛盾の中の面白さ

市民家庭は、子どもが路上に出て外部の世界と直接交わることを回避することで理想的教育を達成しようと試みてきました。しかし、現実の生活範囲を超える外部の世界をいかにして媒介的に子どもの経験の中に取り入れ、子どもの社会化を図るか、という大きな問題がそこに立ちはだかっていました。優秀な教師による少人数教育施設には、需要と供給の両面で限りがあります。そこで、その役割を代行するものとして登場した新たなメディアが書物でしたが、一方で、読書という行為は密室での個人的営為という性質をどうしても免れません。『ロビンソン』の著者自身も、読書の持つ非行動的・没我的性質に危惧の念を持っていたと思われます。それゆえ、書物の果たす役割に大きな期待をかけながらも慎重に、一日の営みの後に適当な分量だけ戸外で語られる設定を施したわけです。

〈書物〉による〈社会〉の〈子ども部屋〉への取り込み。これは、本来きわめて矛盾したことだと思います。読書という個人的営為を共同の活動の場にいかにして結びつけるか、このような葛藤の前に立たされたのが、当時の児童文学の姿であったといえます。しかし、ロビンソンの物語から読み取れるのは、課題の困難さよりも新たな問題を目前にした高揚感のように思われてなりません。このように形成すべき社会とともに走り、その伴侶となりうるという希望と確信がこの物語の背後に明らかに透けて見える、ここに私は啓蒙主義期の児童文学の面白さを感じるのです。

（関東学院大学）